

# 復活の人称

## The Grammatical Person of Resurrection

川津 茂生 KAWAZU, Shigeo

● 国際武道大学  
International Budo University



先駆的二人称, 先駆的一人称, 人称の三位一体

anticipatory second person, anticipatory first person, trinity of grammatical persons

### ABSTRACT

先駆的二人称の概念は、二人称を「向こう側」から「こちら側」へと逆転させたが、二人称は、再度逆転されて、「向こう側」のキリストによって実現される。それによって、さらなる逆転が可能になり、先駆的二人称は、「こちら側」においても実現される。先駆的二人称は、それにならねばならない、と考えてなれるものではなく、まず、キリストの先駆的二人称に接することによって、実現して行く。先駆的二人称は、一人称を産み出し、それは、永遠の一人称を先取りした、先駆的一人称となる。先駆的一人称、先駆的二人称、三人称は、神の第一位、第二位、第三位が三位一体であるように、三位一体である。一人称と三人称が対立したように見える、意識と脳の問題なども、人称の三位一体の考え方からしないと解決しないだろう。確かに永遠に存在するのは、神の三位一体の似姿なる、人間存在の人称の三位一体である。

In the concept of anticipatory second person of the Trinity, the location of the second person was reversed from “the other side” to “this side”. The location of the second person is reversed again and realized by Christ on “the other side”. By the realization of the anticipatory second person in Christ, the second person can be reversed again to “this side” and realized on “this side”, too. The anticipatory second person can be established not by means of a person’s determination, but by facing Christ’s anticipatory second person. The anticipatory second person gives birth to the first person, that is, the anticipatory first person, which anticipates the eternal first person. There is a Trinity among the first, second, and third (grammatical) persons, just as there is the Trinity among the First, Second, and Third Persons of God. The problem of the antagonism between the first person-consciousness and the third person-brain may be solved only on the basis of the concept of the Trinity of the grammatical persons. What exists eternally is the Trinity of the first, second, and third grammatical persons of the human being, which is the image of the Trinity of the First, Second, and Third Persons of God.

## 逆転の逆転の逆転

川津はこれまでに先駆的二人称という概念と、それについての思索を発表してきた(川津, 2007, 2008, 2009, 2010, 2011)。先駆的二人称とは、理性的に考えれば、二人称は、「向こう側」に定位されるべきではなく、「こちら側」が積極的に自ら進んで、「向こう側」に対して、二人称になるべきである、という事情を表現するために作られた概念であった。

理性的に考えると、どうしてそのような事情になるのだろうか。

それは、私たち一人一人が、みな、生きる意味を求めているからである。そして、生きる意味を本当に与えてくれるものは、二人称の「汝」でしかないにもかかわらず、「汝」は、「こちら側」の意のままに現われてくれないからである。「私」は、「汝」の不在の故に生きる意味を見出せず、虚無体験に怯えている。しかし、ふと気づけば、この虚無体験に怯えているものは、「私」だけでなく、「私」の隣人も同様だ。それなら、「私」は「私」の生きる意味の問題を、とりあえず、一旦棚に上げ、問題を「こちら側」から「向こう側」へと逆転させて、「向こう側」の生きる意味の問題を解こうではないか。そのためには、「私」が「こちら側」にとっての「汝」を求めるのではなく、「私」自身が、「向こう側」にとっての「汝」になることが必要だ。つまり、「こちら側」の「私」が一人称を捨て、自ら進んで、「先駆的二人称」になるのだ。

理性的に考えれば、以上のような事情になる。(逆転は、「汝」の観点からいえば、「向こう側」から「こちら側」へと逆転する。)

しかし、理性的にはそうであっても、「私」は一人称を捨て、愛の先駆的二人称に成りきれぬであろうか。実は、成りきれないのだ。つまり、理性的には、問題を「こちら側」から「向こう側」へと逆転させ、まず、「向こう側」の生きる意味の問題を解決しようとする。(すなわち、「汝」を「向こう側」から「こちら側」へと逆転させる。)しかし、その逆転で、「向こう側」の問題は解決

していかない。

川津は、はじめ、漠然と、「こちら側」が先駆的二人称に成りきれぬ、というようなニュアンスで考えていた(川津, 2007)。しかし、次第に、それは、不可能であるという考え方に変わって来た(川津, 2011)。

一般的にまた理性的に考えれば、問題を、「こちら側」から「向こう側」へと、逆転させ、あるいは、二人称を「向こう側」から「こちら側」へと逆転させ、「こちら側」が愛の二人称にならなければならない。言い換えるなら、愛を求めることから、愛を与えることへの、逆転である。

すなわち、愛を求めても得られないから、与えるのである。

しかし、愛を求めても得られないものが、愛を与えることができるであろうか。それは、不可能である。それが、不可能であるなら、私たちは、再度、虚無体験を経験しなくてはならない。なぜなら、愛は、求めても得られないが、逆に、与えようとしても、与えられないからである。再度挫折することによって、「こちら側」の虚無体験は、「向こう側」の苦しみとともに深化する。

ここにおいて、上記の逆転は、再度逆転されることになる。すなわち、逆転の逆転が生じる。

最初の逆転は、「こちら側」が二人称を求めても得られないから、「こちら側」から「向こう側」へ二人称を与えることへと、逆転しようとしたのであった。しかし、逆転の逆転とは、「こちら側」から二人称を与えようとしても与えられないことが、分ったとき、突然、逆光のように、「向こう側」から「こちら側」に向かって、二人称を与えるものが現れるということである。

逆転の逆転を可能にするものは、キリストの十字架である(川津, 2011)。キリストの十字架が、「私」の「向こう側」の先駆的二人称として、突然、確実に現われるのである。このことによって、一般的に考えれば「向こう側」が二人称になってくれるとは限らないのだから、「こちら側」が二人称にならなければならないという、「こちら側」への逆転が、再度、「向こう側」へと逆転されるのである。逆転の逆転は、「向こう側」のキリス

トの二人称が確実にする。

ところが、このようにして、「向こう側」に唯一の先駆的二人称として、キリストが現われるとき、逆転の逆転は、更に再び逆転されて、逆転の逆転の逆転が生じる。

最初の逆転は、二人称を、「向こう側」から「こちら側」へと逆転させた。二番目の逆転は、最初の逆転が失敗したとき、先駆的二人称を、「こちら側」から唯一の先駆的二人称である「向こう側」のキリストへと逆転させた。三番目の逆転は、「向こう側」のキリストが先駆的二人称として、登場することにより、再度、二人称が「こちら側」へと逆転し、「こちら側」もまた、キリストの故に、先駆的二人称となるということである。

## 律法の哲学と福音の哲学

上に述べた事情を、別の角度から語り直せば、次のようになるであろう。川津は「先駆的二人称」の思想を提唱してきたが、それは当初、律法の哲学であったといえる。それは、「自己が先駆的二人称に成らねばならない」という思想であった。それは、自己の根底の虚無に深く気づいた人間が、同じように虚無を抱えている他者に対して、虚無を乗り越える足がかりとしての「汝」を、自ら進んで、与えようとする思想であった。すなわち、自分が一番欲しいのが、「汝」なのだから、自分はさておき、他者に「汝」を与えねばならない、と考え、その義務感に従う思想であった。

その思想は、深さの次元を持っていた。しかし、その思想の試みは、敗れて行くものだったのである。

人間存在は、またその共同社会は、お互いが愛し合わねば成立しない。その事実、どこまでも冷徹に事実である。愛し合うということは、お互いが、お互いにとっての先駆的二人称になっていくということである。しかし、人間存在は愛し合えない。それもまた、どこまでも冷徹に事実である。人間の努力による、先駆的二人称の試みは、必ず失敗する。静かに顧みれば、私たちは、みな、罪を犯しているのだから。

しかし、愛し合えないからこそ、愛し合わねばならない。愛し合わねばならないからこそ努力する。それにも拘らず、結局、愛し合えない。律法の哲学は、何が人間存在の本来あるべき姿であるかを告げはする。しかし、それは、人間存在が、本来あるべき姿になれないことを、明らかにする。

この背理を解決して行くものは、律法の哲学ではなく、福音の哲学でなければならない。すなわち、神がまず、私たちを愛したということ、そして、その愛が、キリストの十字架において確実なものとなったことである。

これを人称の理論の立場から表現すれば、神がまず、先駆的二人称となったということ、そして、神の先駆的二人称が、キリストの十字架において、確実なものとなったということである。神が先駆的二人称となったことによって、私たちもまた、先駆的二人称になっていくことができる。愛の関係が成就するのだ。

## 一人称の前提条件

先駆的二人称が「向こう側」にも「こちら側」にも成立していくとき、一人称の生成はどうなるのであろうか。

私たちが先駆的二人称になるとき、「私」のエゴイズムの一人称のは、一旦死ぬ。一人称が一旦死ぬからこそ、先駆的二人称が安定するのだ。しかし、一人称が死んでしまえば、「私」はいなくなり、主体が消える。

「私」の消去のあとで、一人称は再び復活しないのだろうか。一人称は復活する。しかし、一人称が復活するためには、前提条件がある。その、一人称が復活する前提条件こそ、目の前にいる二人称である。一人称は、自分の前に、自分を受け入れてくれる二人称があるからこそ、それに呼びかけるものとして、成立できるのである。

人間同士は、人間の力だけでは、お互いにとっての先駆的二人称に成りきれない。人間同士が自分たちの力で、二人称になろうとするときには、どうしても、愛の二人称とエゴイズムの一人称の混淆が生じてしまい、純粋な二人称が成立しない。

そういった、人間存在の限界の中であって、神が、人間にとっての二人称になること以外に、二人称の可能性はなかったわけである。

そして、神は、キリストにおいてついに先駆的二人称を確立した。そのキリストが厳として目の前にいるからこそ、一人称が芽生えるのだ。

近代の一人称は、実は、それ以前に存在した、原人称における、エゴイズムの一人称が一旦死んで、キリストの二人称によって成立した、復活の一人称だったはずではないだろうか。近代の成功と失敗の逆説は、その復活の一人称成立の前提条件を次第に忘れて、自立した一人称を人間存在のモデルとしたことである。もちろん、「私」は「私」なのだ、と考えることができたことは、一つの達成ではあった。自由な自我が確立できたことは、素晴らしいことではあった。インディヴィジュアルとして人格が意識され、一人称の自我の自覚が高まったからである。

しかし、一人称が、自分だけで、一人称として自己を立てることができると考え始めたのは、傲慢であった。一旦成立した一人称は、どんどん世俗化への道を、突き進んでしまう。二人称の神を忘れて、自分自身で一人称を確立したかのような錯覚に陥ってしまう。エゴイズムの一人称が一旦死んで、新生の一人称が復活したはずなのに、近代人の一人称は、再び、エゴイズムへと落ち込んでしまう。明らかな、裏切りである。近代人の一人称を支えていた、二人称のキリストを忘れたのである。

私たちは、二人称のキリストの前に、もう一度立たなくてはならない。十字架で達成された、キリストの先駆的二人称の前に再び立たねばならない。そのとき、やっと再び、私たちは、私たちの一人称を回復するであろう。

## 一人称の再生 — 内省的反省

自立したかに見えた近代の一人称の自我は、実存的に自由に決断し、自己の幸福を探求できるかに見えた。しかし、現代では、自我の確立を、自我の確かさに根拠づけることができない。自我は、

少しも、確かではない。たとえば、戦後の一時期のように、経済が順調な時代には、経済的な活動の中に、自我が生きる意味を見出せたかのように、感じられたこともあった。しかし、今や、時代は変わった。経済至上主義が、生きることの最終的な意味を与えないことは、明らかである。

今、私たちを戸惑わせているものは何なのか。私たちは、本当は、もう知っているのだ。私たちは、もはや、隣人愛に生きるしかないのだ。しかし、どうしたらよいのだろうか。私たちは、少しも、隣人愛に生きることができない。どうしたというのだろうか。自由に決断する自我は、自由に、隣人愛に生きることができない。

自由に決断する自我は、足がかりとなる土台を失っている。もう、私たちには、足場がない。足場がないのに、どうやって、隣人愛へと、跳躍できるだろうか。足元をみれば、虚無が広がっている。自我が掴もうとした、意味の充足は、虚無の虚空のなかに、霧のように消えて行った。

この虚無の中で、「私」は、ひとり孤独に死んで行くのか。そのとき、「私」は、ふと気づく。この虚無の中で死んで行くのは、「私」ひとりではなく、わたしの隣人もなのだ、と。そして、「私」はさらに気づく。「私」の人生に意味を与えてくれる最終的な拠り所としての「汝」、しかし、誰も「私」に与えてくれない「汝」を求めているのは、「私」だけでなく、「私」の隣人でもあることを。それなら、その事実の認識の故に、「私」こそ、隣人にとっての「汝」（先駆的二人称）になろうではないか。最後の力を振り絞って、「私」の生と死を賭けて、隣人にとっての「汝」になろうではないか。

それは、冒険である。そもそも、自己の足場を持たない「私」が、隣人の叫びの故に、隣人にとっての意味の源泉としての「汝」になれるのか。それは、冒険である。そして、結局、「私」は隣人にとっての「汝」（先駆的二人称）に成りきれずに、破れて行く。「私」は先駆的二人称に成りきれない。敗れ、そして、暗闇。

しかし、そのとき、逆光の光のように、徐々に明るみ出して来るものがある。それが、キリスト

の十字架なのである。その光の中で、再度、一人称が産まれる。そもそも、再生の一人称であった、近代の一人称が破れたのだから、一人称は、再度、再生しなくてはならないのである。

## 先駆的一人称

そして、その一人称は、一度死んだ一人称が、神に赦されて復活した一人称として、私たちの死後の復活を先駆的に予兆する、「先駆的一人称」となるであろう。先駆的一人称は存在の核である。それは、人核と呼んでもよいかもしれない。そして、人核としての先駆的一人称が人格と考えられてきた。

川津は、これまで、先駆的二人称という考え方を従来提唱して来たが、先駆的二人称という場合、先駆的というのは、他者が、「わたし」に対して、「あなた」と呼びかける前に、自己がそれを予期して、先駆的に「あなた」すなわち二人称のペルソナを身につける、という意味での、先駆的であった。

しかし、先駆的一人称という場合の、先駆的は、自己が、永遠の命（死後の復活の生命という意味も含めて）の予兆を、先駆的に意識した一人称という意味での先駆的である。

そのような意味で、私たちは、キリストの前に立つとき、先駆的一人称となる。

そもそも、近代の自我は、「汝」としての神の前に立ち続けた人間が、やっと、神によって、許されて達成した、先駆的一人称だったのかもしれない。それは、もともと、復活を予兆する人称であったのかもしれない。それにもかかわらず、それを、現世だけの、世俗の一人称へと解釈し直したことが、危機の始まりであった。

近代の一人称が、もともとは、先駆的一人称であったのだとすれば、私たちは、再び、一人称をその本来の意味での先駆的一人称として、取り戻さなければならない。そのためには、私たちは、神との関係、キリストとの関係を回復しなければならないのである。

## 人称の三位一体

先駆的一人称という場合、それと先駆的二人称との関係、また、それらと三人称との関係は、どうなるのであろうか。

先駆的一人称、先駆的二人称、三人称（身体）は、ひとりの人間の中で、三位一体をなしている。神の第一位（the First Person）、第二位（the Second Person）、第三位（the Third Person）が三位一体であるのと同じように、人間存在の一人称（the first person）、二人称（the second person）、三人称（the third person）は三位一体なのである。

一人称、二人称、三人称の三位一体は、球面モデルで表象できる。そのばあい、球面というのは、ボールのような、内部が中空の球面であり、球面を外側から観ると、二人称となり、球面の裏面を中空の内部から見ると、三人称となり、球の中空になった内部の中央に、人核としての一人称がある。

私の提唱する球面モデルは、人称の三位一体を、数理的というか、幾何学的というか、幾何学的な図像的な形で表現したものであって、人称の三位一体は、必ず、この球面モデルによって表象されねばならないというものではない。

人称の三位一体の幾何学的な表象ということであれば、一人称、二人称、三人称を三角形の三つの頂点に配置することも可能であろう。

球面モデルの発想には、一つには、自己における面的なものとの点的なものとの統合という視点があり、また、もう一つには、点的なものが（身体も含めた）対象的なものを対象化する空間、すなわち対象化空間を配置するということがあった。

面的なものは、視「面」として、受容性の面であり、二人称と考えられた。点的なものは、対象化する視「点」であり、対象に働きかける自我である一人称と考えられた。

## 三位一体でなければ解けない問題がある

脳科学においては、三人称の物質である脳<sup>1</sup>が、いかにして、一人称である意識を生成するかが問

題となるが、その際、問題は、一人称と三人称の対立が問題となり、絶えず、三人称の裏面に一人称が考えられている。その問題設定においては、二人称が出てこない。このことが、もっとも大きな問題解決の障害なのである。

しかし、一般的に問題を、一人称／三人称対立の問題としてはいけない。人称の問題は、絶えず、一人称、二人称、三人称のtrinityの問題として、考えて行かなければならない。三人称の裏面は、一人称ではなく、二人称なのだ。一人称は、三人称と対立していない。

三人称の裏面としての二人称は、受容性の人称であり、他者を受け入れる愛の人称である。それは、また、世界をも受容する。それに対して、一人称の根本的な役割は、働きかける自我としての働きだといえるが、働きかける一人称は、人称の三位一体の球面モデルにおいては、受容する二人称と、場所が違う。受容する人称としての先駆的二人称と、働きかける人称としての先駆的一人称は区別される。

一人称は、受容する二人称の、相互受容の究極の結晶として、球面の内部で、中央に発生する視「点」としての、あるいは、人核としての、先駆的一人称なのだ。物質である身体の裏面は、二人称であり、一人称ではない。視「点」としての一人称性は、視「面」としての二人称性が、球面の内部の重心に、視「点」として結晶したものだ。

身体性の内部に、超身体的<sup>2</sup>な、中空の空間があるということだ。それは、もちろん、解剖学的に発見できる場所ではない。そのような、超身体的な内部超越的胎（球面の内部）が発生すること自体、身体が、その裏面に、表面としての二人称を持つから可能なのである。二人称性の表面は、超身体的な内部超越的胎を生成する。その内部超越的胎の空間の中に、一人称が、発生するのである。

ところで、受容性という観点から見ると、「こちら側」の受容性によって、「こちら側」の自我すなわち一人称が発生するのではない。「こちら側」の一人称は、「向こう側」の受容性すなわち二人称によって受け入れられることによって、そ

れに呼びかける能動性として発生するのである。

また、私たちは、まず、先駆的一人称をもつのではない。確かに、一人称的なものは、始めからあるが、それは、二人称的なものと融合していて、未だ、点的な自我になっていない。始めからあるものは、原人称であり、それは、一人前と二人称の融合した、面的なものである（川津, 2008）。原人称から、一人称を消去するとき、面的なものは、先駆的二人称として、愛の人称になるが、その実現のためには、多くの苦難を経なければならない<sup>3</sup>。多くの苦難を経て、次第に、キリストの十字架の光が、明るんで行く中で、ゆっくりと、原人称の中の一人称が死んでいく。

そのとき、次第に、身体の内側に、超身体的な内部超越的胎が発生し、その中央に、視「点」としての、自我としての、新たな一人称が発生する。そして、愛し合う共同体の内部でしか、このような、新しい一人称の発生はありえない。

そのような形でしか、人称の三位一体の実現もあり得ないから、一人称と三人称の対立の問題の解決方法も、容易には、見つからないのである。愛し合う共同体が、実現した場合にのみ、一人称と三人称の対立の問題が、人称の三位一体の形によって、解決して行く。

脳科学の意識と脳の問題も、一人称と三人称の対立の問題として、解決しようとすれば、解決しない。人間は、愛し合う共同体を実現すべく、神に求められているのだから、それが実現した場合に始めて、理論的にも解決して行く問題を、世俗的な観点からのみ解決しようとするのは無理がある。

理想型を準備する段階として、一人称と三人称の対立があるのであり、本来は、一人称、二人称、三人称の三位一体の形で、解決して行くものを、愛の共同体が実現していない現代の世俗の段階で、無理やり解決しようとするから、一人称と三人称の対立として、問題が、解けなくなってしまうのである。

## 確かな存在

存在するということの、最も確実なものは、三人称の物質ではない。では、三人称の物質ではなく、一人称の意識の方が、より確実に存在するのか、というと、そうでもない。存在するということの、最も確実な形は、人称の三位一体である。

一人称、二人称、三人称が三位一体となっている、愛の共同体の内部の、人間存在が、もっとも確実に存在するものの形を持っている。それは、神の三位一体の似姿である。

The first (grammatical) person, the second (grammatical) person, the third (grammatical) person の Trinity が、the First Person of God, the Second Person of God, the Third Person of God の Trinity の似姿なのである。

ただし、神の第二位のキリストは、客観的に、肉体をとって現われたという意味で、三人称と言える。しかしながら、キリストは、先駆的二人称を十字架において、完成させたという意味で、二人称でもある。キリストは、神の三位一体の中の第二位でありながら、人間として、人称の三位一体も持っている。キリストは、神の第二位であると同時に、先駆的二人称として、二人称でもあり、客観的存在として、三人称でもあるから、三人称的な二人称、二人称的な三人称ともいえる。キリストは、歴史の中に、確実に客観的に三人称的に実在した、先駆的二人称なのである。先駆的二人称としてのキリストが、過去に客観的に実在したということは、現在も客観的に実在するということである。そしてまた、キリストは先駆的一人称でもある。

先駆的二人称、先駆的一人称、そして、三人称も含めて、人称の三位一体は、永遠に実在することの先駆けであり、復活を予兆しているのである。それは、人間存在の人称の三位一体が、もっとも確実に存在する神の三位一体の似姿だからである。

## 参考文献

- Hilty, Carl (1973). 眠られぬ夜のために第一部 (草間平作・大和邦太郎訳) 岩波書店
- Hilty, Carl (1973). 眠られぬ夜のために第二部 (草間平作・大和邦太郎訳) 岩波書店
- 鹿取廣人・杉本敏夫・鳥居修晃(編)(2011). 心理学第4版 東京大学出版会
- 川津茂生(2007). 先駆的二人称から見た存在 教育研究, **49**, 21-29.
- 川津茂生(2008). 人称的構造の素描 教育研究, **50**, 21-28.
- 川津茂生(2009). 一般人称理論へ向けて 教育研究, **51**, 1-9.
- 川津茂生(2010). 和解の人称 教育研究, **52**, 29-36.
- 川津茂生(2011). 実存響応の達成 教育研究, **53**, 9-13.

## 注

- 1 鹿取・杉本・鳥居(2011)は、ここでは「物質的には、高次の中枢神経系ないしは脳の活動である」として、こころの物質性をはっきり認めている。
- 2 超身体的というのは、非常に身体的という意味ではなく、身体的なものを超えてという意味である。
- 3 Hilty (1973, 1973) は、人間が、宗教的な境涯に達するには、老年期に至るまでの多くの苦難を経なければならぬと考えている。私は、それに全く同意する。